



2019 年 (令和元年)
10月号 (No. 893)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

友好合同登山隊としてエクアドル・チンボラソなどに登頂

本年9月、創立120周年記念事業の一環で、国際交流事業として本会主催の友好合同登山隊を南米エクアドルに派遣した。同国最高峰のチンボラソや、世界で最も標高の高い活火山コトパクスなどに登頂したほか、トレッキングや観光を楽しみ、両国の友好を深めた。来年はエクアドル側の訪問団を迎えることになる。

登山隊リーダー 渡邊雄二

日本・エクアドル外交関係樹立100周年を記念して

日本とエクアドルは、1918年8月26日に外交関係を樹立し、2018年に外交関係樹立100周年を迎えた。これまで周年を盛大に祝うため経済、文化各分野で記念事業を実施し、登山の分野では、日本山岳会とエクアドル山岳連盟が友好合同登山の事業を実

施することになった。登山隊の名称を「日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念 友好合同登山隊」とした。

事業内容は①合同登山、②山岳会同士の交流会、③両国の山や自然を紹介するDVDの上映、写真展などの開催である。

この報告は、本年9月に日本山岳会がエクアドルを訪問し、合

目次

友好合同登山隊としてエクアドル・チンボラソなどに登頂	1
ドルボ・トレッキングー河口慧海の足跡をたどる	4
今年も全国支部合同会議を開催	
活動報告を中心に問題点など意見交換	7
公益事業で施設の子どもと「山交流」	8
火打山の環境保全活動に参加して	
ーライチョウを絶滅から救いたいー	9
八幡高原・霧ヶ谷湿原で環境保全活動	10
東西南北	11
活動報告 山行委員会	12
Climbing&Medicine	84
図書交換会出品目録および購入申込みの案内	14
新入会員	16
図書受入報告	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

同登山やトレッキングを行ない、会員同士の交流や情報交換を実施したものである。2020年9月7日～18日には、エクアドル山岳連盟の会員が日本を訪れ、同様の交流を行なう予定である。

また、本登山隊の参加者14名に対し、富士山測候所を用いた事前調査(8月17日～19日)、および現地調査(エクアドル)を実施し、事前調査の生理学的データと、現地(ベース4800m付近など)でのデータ、また、現地登山活動でのパフォーマンスの比較を行なうことを目的に調査研究を実施した。これは高所医学の進歩に貢献するとともに、近年、盛んに企画されている高所観光(登山やトレッキング)を、短期間の準備で安全に実施できるようにするための新たな

知見を提供できる可能性があり、現在、データなどの分析、検討を行なっている。

【期間】

2019年9月1日(日) 成田空港14時25分発(アエロメヒコ航空57便)

9月2日(月)～11日(水) 登山、トレッキング、交流会・情報交換
9月14日(土) 成田空港6時20分着(アエロメヒコ航空58便)

【登山隊の構成】

リーダー||渡邊雄二(7914)、アドバイザー||重廣恒夫(7931)、隊員||前田文彦(8432)、賀集信(8678)、本多幸子(8808)、藤田礼子(9648)、吉井修(12342)、荒木輝夫(1402)、猪熊隆之(14744)、中谷康司(15433)、松尾みど



大使公邸で開かれた歓迎レセプション

り(16321)、三浦拓朗(16460)、瀧澤岳(1148)、田島圭悟(1148) 以上14名

【留守本部】

留守本部長 高野正道(11621) 本会側担当 中山茂樹(国際委員会委員長、11319) エクアドル側担当 ホセ・フラード(エクアドル山岳連盟会長、ピチンチャ山岳会会長) 協力 志賀尚子(在エクアドル日本国大使館医務官)

活動報告

9月1日 高野留守本部長や家族の見送りを受け、成田空港を14時25分に出発、メキシコ・シテイ経由でエクアドルの首都キト(標



コトパクス山頂は近い。高度と闘いながら一步一步登る

高2800m)に到着(現地時間23時30分)。エクアドル山岳連盟会長のホセ・フラード氏ら山岳会員、志賀尚子氏ら日本国大使館職員の出迎えを受け、深夜、バスで市内のホテルに投宿した。

9月2日 18時より首藤日本国大使主催による歓迎レセプションが大使公邸で行なわれた。エクアドル側からはブラド観光大臣、外務省アジア太平洋部長、スポーツ庁次官、チンボラソ県知事、エクアドル山岳連盟会長以下会員多数、キト日本人会会長ほか在留邦人の方々が出席され、外交関係樹立100周年の祝賀の下、登山隊を盛大に歓迎していただいた。登山隊

からは、参加者各位に日本山岳会関係の資料(『日本山岳会百年史』、登山隊報告書、Japanese Alpine Newsなどを贈るとともに、富士山をはじめとする日本の山々の紹介をDVDで上映し、お互いに情報交換、交流を深めた。

また、本会アルパインフォトクラブの協力の下、日本の山岳写真15点を日本から持参した。これらについては、後日、エクアドル山岳連盟が主催する写真展で展示し、日本の山々を紹介することになった。

レセプション終了後、隊員は友好合同登山隊の主旨により、キト滞在期間中はそれぞれエクアドル山岳連盟会員の自宅にホームステイすることになった。そのため、ホスト・ファミリーと面会し、それぞれの家庭へ。(ホームステイ)

9月3日 ルク・ピチンチャ山(4696m)へ順応トレッキングのための登山。ホームステイ先から各自キト市郊外のエレフェリコ乗り場に集合し、ゴンドラで一気に高度4000mまで上がり、往復約7時間の登山活動を行なった。この日の行動の様子で高所への順応が期待された。(ホームステイ)

9月4日 終日、赤道記念碑や

赤道博物館、キトの旧市街を観光した。赤道博物館では、赤道直下ならではの様々な実験ができ、水の渦の巻き方の違いや卵を立てる試みに一喜一憂した。キトの旧市街は世界遺産第1号として登録され、400年前のスペインによる植民地時代の建造物などが大変興味深かった。(ホームステイ)

9月5日 コトパクス山(5897m)登山のため、キロトア湖經由コトパクスの山小屋(ホセリバス小屋)に向かった。コトパクス山はどこから見ても富士山にそっくりで、日本人にとっては大変親しみを感じる山容である。途中、国立公園事務所に寄り、入域許可の手続きを行なった。バスを降りてから約1時間、徒歩にて標高4810mの山小屋に到着した。さすがにこの歩みは牛歩のごとくであった。夕食後仮眠して、23時30分にコトパクス山登頂に向けヘッドランプを頼りに星空の下、出発した。日本人11名がエクアドル・ガイドと6パーティを編成し、氷河帯に入るとロープを結び合った。

9月6日 午前5時45分〜7時30分の間に、全員が5897mの山頂に登頂した。夜明けとともに

立った世界で最も標高が高い活火山からの眺望はすばらしかった。それぞれのパーティのコンディションによって、正午までに全員が山小屋まで無事下山し、その後、キト市内までバスで戻った。トレッキング隊は早朝、山小屋を出発し、ルミニヤウイ山(4700m)に登頂し、山麓の町で登山隊のバスに合流した。(ホームステイ)

9月7日 休養日。ホームステイ先の配慮で各自、現地の自然や文化を体験しながら過ごした。この日はトウモロコシと馬のお祭りの日で、各地でいろいろな催しが開催され、ホスト・ファミリールと一緒にお祭りに参加した隊員もいた。(ホームステイ)

9月8日 エクアドルの最高峰チンボラソ山(6310m)登山のためにバスで南米大陸ハイウェイを南下、昼食時間も含めると7時間のバスの旅であった。途中、公園管理事務所で入城許可を得て、登山基地のカレル小屋(4850m)に夕刻、到着した。

チンボラソ山登山については、コトパキシ山登山後にエクアドル側と協議し、日本隊員の登山は6名、エクアドル・ガイドは5名と

することにした。理由は、ルート状況が大変悪くなっていることや、夜間の行動が長時間に及ぶため若手を中心に選抜した。登山隊は深夜22時、月明かりの下、西稜ルートから山頂を目指した。

9月9日 登山隊の1パーティが、ガイドのヘッドランプのトラブルでやむなく登山中止という残念な結果が生じたが、ほかのパーティは日の出前には西峰に登頂、日の出を待つて本峰を往復し、無事に正午ごろ山小屋へ下山した。この日も終日絶好の天気恵まれた。トレッキング隊はテンプロ・マチャイを周遊、昼ごろに山小屋に戻った。その後、バスでキト市内に戻り、ホスト・ファミリールを出迎えを受けてホームステイ先に向かった。(ホームステイ)

9月10日 終日休養日。各自、オタバロ族の市場などへの観光ツアーなどを楽しんだ。本部は日本大使館や関係者への挨拶に向いた。(ホームステイ)

9月11日 夕方、エクアドル山岳連盟主催の送別会が市内のレストランで開催された。首藤大使も参加され、日本大使館職員、ホスト・ファミリール、現地の山岳会員ら

が集い盛会だった。JAC旗にお互いの署名をしたり、エクアドル隊員のユニホームをプレゼントされたりなど、和気あいあいのもと別れを惜しんだ。(ホテル泊)

9月12日 早朝、エクアドル山岳連盟のフラード会長やホームステイ先の方々、日本大使館の志賀先生らの見送りを受けてバスで空港に向かい、メキシコ・シティ経由で帰国の途についた。

9月13日 メキシコ・シティ

9月14日 午前6時、成田空港に着。中山国際委員長の出迎えを受け、登山隊は解散した。

国交樹立100周年の記念行事



絶好の天気にも恵まれ、チンボラソ山頂に立った一行



エクアドル(赤道の意)という国名の元となった赤道記念碑前にて

の一環としての友好合同登山の半分が、所期の目的を十分に達成して成功裡に終了することができた。エクアドルでは観光大臣をはじめとする政府関係者や山岳連盟関係者、首藤日本国大使以下の大使館職員、在留邦人の方々が私たちを歓迎し、この事業を支援していただいた。このおもてなしに対して、来年は日本山岳会として万全の準備をしてエクアドルの岳友を迎えたいと思う。日本山岳会創立120周年の祝賀に向けても、今後ともご支援をよろしく願います。(日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念 友好合同登山隊プロジェクト・リーダー、栃木支部長

TRAVELOGUE

ドルポ・トレッキング―河口慧海の足跡をたどる―

26日間のトレッキング

河口慧海は約120年前にマルファを出発してから北西に向かい、クン・ラからチベットに越境したとほぼ特定されている。しかし、ジヨムソン側からは急激に高度を上げるために歳をとるときつい。我々のトレッキングは徐々に高度を上げる、逆の西から東に向かうルートとした。

全体の旅行期間は2019年6月17日から7月24日の38日間。トレッキングの期間は予定より2日間短縮されて、26日間だった。

メンバーは私ともう1人の計2名。スタッフは、カトマンズからガイドとコック、ガイドの息子の3人。そして、現地のジュバルからラバ(カッチャル)使いの馬方とその兄のキッチン・ボーイの2人と、ラバ6頭である。

トレッキングというと簡単に思われるかもしれないが、ドルポはエベレスト方面のレンジョ・パスやチョラ・パス、あるいはアンナ

竹花 晃

ブルナ方面のティリチョ・レイク越えに比べても、内容的にも日数的にもはるかに厳しい。行程は、5000m級の峠を6ヶ所上り下りした。ルートが明瞭でない箇所も多い。

川には橋がほとんどないため、靴を脱いだ徒渉は10回以上した。滑落したら谷底まで一直線というザレ場も多く、フリーで3〜4級程度の岩場を上り下りするなど、緊張を強いられる場面もあった。

なお、今回のドルポの旅は、雨量は多くはないものの、夜半から早朝にかけてと、行動中も午後から夕方にかけて雨が降ることが多かった。

フォクスンド湖からアッパードルポへ

旅は、カトマンズからタライ平原のネパールガンジに飛び、さらにジュバルまで飛行機で入る。天候不良により、飛行機はネパールガンジで2日間待たされた。6月

25日、ジュバルに全員がそろい歩き始める。

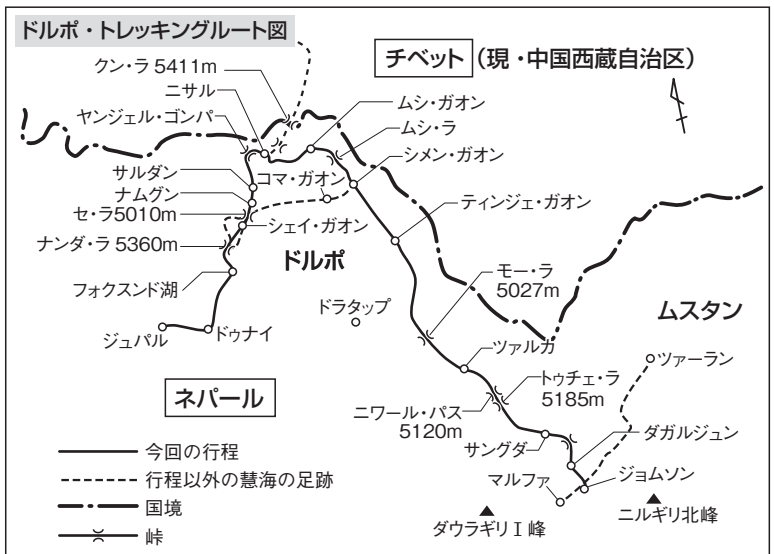
ドゥナイからフォクスンド(ボクスンド)湖のあるレンジョまでの3泊はロジ宿泊で、その後のサングダまでの17泊はテント泊である。

フォクスンド湖(3600m)はこの旅随一の景勝地であり、やや緑色を帯びた青色の湖は不気味でさえある。

フォクスンド湖から先はアッパードルポに入り、本格的なトレッキングとなる。湖の周囲はほとんどが切り立った断崖であり、道は400mくらいの高巻きとなる。

湖から北上して初めてのキャンプ地はトゥロ・ドゥンガであった。29日はフォクスンド・コーラを上り、トゥク・サク・コーラの狭い谷に入る。ここからは徒渉を繰り返しながら上る。

谷を詰め、ナンダ・ラ(5360



m)の手前のハイキャンプで宿泊。ナンダ・ラのあたりは冬虫夏草(ネパール語でヤーサグンバ)がよく採れるようで、トレッキング中はヤーサグンバ採りから帰る人たちがたくさん出会った。この時期は冬虫夏草採りの最盛期であった。30日はナンダ・ラ越え。霧雨の中で視界が悪く、またヤーサグンバ採りのトレースが錯綜し、一時

はルートの間違えたが、道を知る馬方たちのお陰で峠に導かれた。峠の北側には残雪が多い。谷を下るとシェイ・スモド・ゴンパ（英語表記ではグンバ）が見えてきた。シェイ・ガオンに至る経路は慧海とは異なるが、慧海もほぼ同じ6月27日に着いている。

翌7月1日は、結果的に今回の

旅の唯一の休養日となった。独りで岩山の奥にある2つのゴンパを目指したが、かなりきつそうで休養にならないと、途中でやめた。

シェイ・ガオンからは、5010mのセ・ラを越えてナムゲンに至り、3日にはサルダンに着いた。テントを張らせてもらった家の主人は、映画『ヒマラヤ』にも出演し、

写真家で、映画

『ヒマラヤ』の監督でもあるエリック・ヴァリの写真集にも載っており、その写真集を見せてくれた。

4日の宿泊地のヤンジェル・ゴンパは、ネパールでも独特の形をした塔が連なる。残念なことにクン・ラはチベットとの交易量が多くなり過ぎて、このチエック・ポストのアーミーが一時的に閉鎖した



青緑色の水をたたえたフォクスンド湖は、この旅随一の景勝地

とのことで、慧海が越境したクン・ラは断念せざるを得なかった。5日は少しだけでも国境に近付こうとクン・コーラを廻り、キャンプ適地がありテントを張ったが、慧海が泊まった場所よりかなり下だと思われる。

開発の進むドルポ

6日はクン・コーラを戻り、パンジャン・コーラに出た。当初はパンジャン・コーラ沿いに直接シメン・ガオンに行く予定であったが、馬方によるとそのルートはカッチャルには通ることができない。ムシ・ガオンに迂回、1泊してから、ムシ・ラ経由でシメン・ガオ



トゥク・サク・コーラの雪渓を登る

ンに迂回するルートに変更した。7日はムシ・ラ（5030m）を越え、シメン・ガオンに着く手前で、今回のトレッキングで唯一ほかのパーティに出会った。しかもそれは、事前に情報を得ていた日本からの隊であった。

ドルポも開発が進み、シメン・ガオンと次の宿泊地のティンジェ・ガオンの中間からチベットへの峠にはバイクの道ができており、バイクが中国と行き来していた。ティンジェにもチベットから多くの物資が入っており、秘境と言われたドルポも変わりつつある。おかげでラサ・ビルという缶ビールにドルポでありつくことができ



サルダンのチベット仏教寺院

た。

11日には霧雨の中、モー・ラ(5027m)を越え、ツアルカ・ボートに着いた。ツアルカはこのあたりでは中心となる大きな村で、パラボラ・アンテナやバイクもある。川喜田二郎の『鳥葬の国』や『ネパール王国探検記』のイメージはすでない。

根深誠さんが尽力してツアルカに設置された橋を見ることも目的の一つだった。橋は村人たちの生活に大いに役立っているように見受けられる。

ツアルカから先のサングダまでは、今回のトレッキングの核心部とも言える。川の徒渉は多いし、急



根深誠さんが架設に尽力したツアルカの橋

峻な崖も多く気が抜けなかった。

ドルボからムスタンへ

ニワール・パスの直下でテント泊。峠から少し行くとダウラギリの北面の山々が見えるはずだが、この日も翌日も雲に隠れてほとんど見えなかった。トウチェ・ラ(5185m)でドルボは終わり、ムスタンに入る。

14日が今回のトレッキングで最もハードなコースであった。慧海の旅行記でも難儀と書かれている。ニワール・パスを少し過ぎると、カッチャルのルートは急峻な崖に挟まれた厳しい人間のルートとは大きく離れて、迂回して行く。ト



『河口慧海日記』の記述に見られる「百丈の橋」

ウチェ・ラから先は、カッチャル道と合流するまで歩く人は少なく、踏み跡もわずか。カッチャルのルートはキャンプ予定地だったサングダ・フェディからも遠く離れた場所を通っていた。次のキャンプ地のサングダまで約12時間歩いて、薄暗くなったころ到着した。

サングダからは車の道が開かれていたが、ダガルジュンへは雨の中、きれいな花の咲く山道の方を半分くらいは歩く。

16日、ついにジヨムソンに到着。立派な道のお陰で河原は歩かなくてすむが、車が通ると砂ぼこりがひどい。ジヨムソンで久しぶりにシャワーを浴びてすっきりした。

17日、この時期には珍しくポカラへ飛行機が飛んでくれた。

慧海が旅したところとは時代も状況も全く異なり、困難さは比べ物にもならないが、慧海の精神や身体の強靱さに改めて驚嘆する旅であった。

〈注〉地名や山名・標高などはネパールで販売している最近の地図に準拠しており、日本の一般的な表記とは異なる場合があることをお断りしておきます。

REPORT

今年も全国支部合同会議を開催 活動報告を中心に問題点など意見交換

総務担当常務理事 永田弘太郎

令和元年度支部合同会議を9月28日(土)・29日(日)の2日間、東京・四谷駅前にある主婦会館プラザエフで開催した。全国33支部の支部長ならびに事務局長ほか、理事、委員長などが参加する、規模の大きな会議となった。

冒頭、古野会長の挨拶では「4つの柱(①遭難防止、②山岳文化振興、③支部活動、④自然保護活動)」を中心とする活動方針が示された。

【会務報告など】

◆令和元年度の「支部事業補助金」の審査結果の報告があった。(坂井副会長)。

◆平成30年度第8回「登山教室指導者養成講習会」の報告と、令和元年度と同講習会の計画が報告された(坂井副会長)。

◆創立120周年記念事業の一環として、猪熊隆之会員による全国支部対象の「山の天気ライブ事業」の紹介がされた(坂井副会長)。

◆およそ20ヶ月分の登山計画書の提出状況と、事故事例の顕在化の

必要性について述べた(山本副会長)。

◆「山の日」事業委員会の活動報告が行なわれ、また、加藤東九州支部長から「山の日登山」ふるさとの山を登ろうin中津・八面山」の報告および次年度大分で開催される「山の日」記念全国大会」の計画が発表された(成川「山の日」事業委員会委員長)。

◆年次晩餐会で、全国の自然保護委員会活動の展示を行なう旨が発表され、全支部に協力を呼び掛けた(谷内自然保護委員会委員長)。

◆準会員から正会員への移行手続きの簡素化の発表と、支部での準会員の役員就任についての規程変更案が提出された(佐野準会員制度検証PT委員長)。

◆「公益社団法人」についての再確認と税制などの特典、また誤解点の確認があった(佐野公益法人運営委員会委員長)。

◆支部会計報告書の作成方法と寄附金の取り扱いについて詳細な説

明があった(古川常務理事)。

◆創立120周年記念事業の一環として、全国の山の古道を踏査公表する企画について、古野会長による理念の説明があった。また、具体例として東海支部の「古道・南塩の道踏査」が佐野委員長から紹介され、全支部全会員挙げての事業として協力を呼び掛けた(永田常務理事)。

◆個人情報保護法のルールの説明がされ、現在、支部で発行されている支部会員名簿の違法性と、当会の法整備の必要性について説明がなされた(奥田総務委員)。

◆記念事業委員会から①組織について、②ヒマラヤ・キャンプについて、③グレート・ヒマラヤ・トラバース企画、④カンチエンジュンガ大展望トレッキング、⑤日本山岳会エベレスト登頂50周年について、⑥当会の機関誌や映像資料などのデジタル化の企画について報告があり、また⑦日本・エクアドル外交関係樹立100周年交流事業報告が、プロジェクトリーダーである渡邊栃木支部長から報告された(重廣記念事業委員会委員長)。

◆支部に対して、家族登山の全国

ネットワーク構築の願いが、波多野理事から行なわれた(野沢副会長)。

◆支部アドレス利用によるメールの送受信問題について解決法などが示された(大塚DM委員会委員長、前田委員)。

◆募集型山行に関して、その運営と旅行業法との関係について話がされた(黒川監事)。

【質疑応答など】

桐生越後支部長から「特別事業補助金」の予算総額の未消化について、高橋東海支部長から支部事業補助金の3年限度について質問があり、支部事業委員会で検討することになった。また、同じく高橋支部長からヒマラヤ・キャンプ、SNSなどについて、高木岐阜支部長からは入会金の金額について、古屋山梨支部事務局長からは登山届について質問があった。さらに、辻関西支部事務局長から準会員への情報通知の依頼、渡部福島支部事務局長から山道の荒廃について意見があり、対応を検討することとした。

そのほか、来年度の全国支部懇談会(宮崎支部)の案内などがあった。

PUBLIC INTEREST ACTIVITIES

公益事業で施設の子どもと「山交流」

千葉支部 三木雄三

様々な家庭環境を理由に、保護者と別れ別れに暮らしている子どもたちがいる。そうした子どもたちにも山歩きを通じて、少しでも将来の生き方に役立ててもらえればと、日本山岳会千葉支部（松田宏也支部長が、児童福祉法に定められた県内の児童養護施設で生活している児童と交流を続けている。

8月6〜7日は、千葉県鴨川市の清澄山山麓でキャンプ。夜は「グアーツ、グアーツ」と不気味な低音で聞こえてくるガマガエルや谷間に甲高く響くシカの鳴き声にびっくりしながらも、昼間はハイキングで汗を流し、「面白かった。また来たい」と明るい笑顔を見せた。「……そうした子どもたちがいるんだけど、どうだろう」。2012年のある日、県内某市の職員だった支部役員から「公益活動」の提案が挙がった。07年6月に発足したばかりの千葉支部は、まだよちよち歩き。仲間だけの山登りだけで精一杯だ。それでも月例会のたびに話し合い「すべての子どもたち

に山歩きで希望を持ち続けてもらう活動は大事だ。お手伝いをしよう」と公益実施の方針が決まり、13年5月、第1回の交流が東京・高尾山で行なわれた。しかし、反省会で「子どもたちは無口。表情も硬かった」と参加した会員が話した。「施設の外は知らないんだ」「大人を信用していない。無理もない」「気長にやろう」……。

ある日、富士山を見ようと出かけた箱根・金時山での帰り。渋滞で遅くなり、施設での夕食時間間に合わない。そんなバスの中で一人の子どもがつぶやいた。「今晚はマック（ハンバーガー）食べられるね。嬉しいなあ……」。「えっ、マックが……」。その子どもものつぶやきを耳にして、複雑な気持ちで胸が潰されそうになった。

年間3〜4回の山歩きを実施した。施設に「マウンテン・クラブ」も誕生し、子どもたちの心に変化が見られるようになった。

大月の猿橋で「丸い石は、上流から流されて角が取れたんだよね」



「千年杉」の巨大さに目を見張る子どもたち（清澄山にて）

と男子6年生。「そうだ、良く調べたね」と頭をなでやると「山、楽しいなあ」と。確実に成長していることを知り、嬉しくなった。

時代が令和になって初の交流会は千葉の名山・清澄山での1泊キャンプ。スーパーで食材の買い出し。3度の食事は「出るのが当たり前」の子どもたちにとって、食事の準備は大騒ぎ。肉や野菜のほか、調味料、油、紙食器、割りばし、軍手……。薪や炭も用意して、1時間かかって火が点いた。野菜サラダにバーベキュー、焼きそばにご飯と贅沢な晩ご飯。「もうお腹いっぱいだよ」と腹を抱えて笑顔。

翌日は7時から朝ご飯。準備体



初めて体験する料理に思わず「あちっ」（内浦山県民の森にて）

操をして山登り。森の向こうに太平洋が。「海だ、広いなあ」。国指定天然記念物の「千年杉」が出迎える清澄山に到着するころには、元気な子どもたちも汗びっしょり。

引率の支部会員は「低学年では身近な自然に接し、親しむといった自然教育ができるし、高学年は林や森の資源の有限性を知り、その有効な利用を考えさせるといった環境保全教育にもなる」と話す。

今回は小学3年生から中学1年生までの男女8人が参加したが、小学4年の男児は「夏休みの思い出ができた。いつか富士山に登りたい」と笑顔を見せていた。

（前・千葉支部長）

PUBLIC INTEREST ACTIVITIES

火打山の環境保全活動に参加して

—ライチョウを絶滅から救いたい—

越後支部 鶴本修一

8月30日から2泊3日の日程で、環境省・信越自然環境事務所が主催し、今年度2回目の火打山の環境保全活動が実施されました。

目的はライチョウを取り巻く火打山の環境を保全することです。ライチョウは国の特別天然記念物で絶滅危惧種。しかも、火打山はライチョウの日本最北の生息域で、20羽前後が生息する極めて貴重な山域となっています。

活動に参加したメンバーは環境省の専門家、妙高市職員、ライチョウ・サポーターズ、環境サポーターズ、そして、日本山岳会所属の私と県山岳協会所属の渡辺茂氏などのボランティア14名でした。

火打山の状況と保全活動

活動は平成28年度から開始。活動内容は、山頂周辺の10ヶ所に調査試験区を設置し、そのエリアの植生変化の調査およびイネ科植物の除去などの作業を行なうものです。火打山の高山環境が、温暖化などの影響を受けて雪解けが早く

なり、植物が以前よりも繁茂して、高山帯の植生変化などが進み、ライチョウの生息の危機が指摘されてきました。その中にイネ科植物の広がりがありました。また、最近の調査ではイノシシやニホンジカなどの野生動物が高山に侵入している事実も報告されて、火打山に生息するライチョウ保護も含めた高山環境の保全が喫緊の課題となっています。

保全活動の取り組み

30日の午後、私たちは2班に分かれて調査試験区に入りました。途中、かつてライチョウが見られたライチョウ平に着きました。周辺の植物は背丈を伸ばし、高山帯を象徴するハイマツも立ち上がっていて、自分の身長ほどになっているのに驚きました。

私たちは最初に、調査試験区(例: 2m×2m)に打ち込んである杭にテープを張り、現状をカメラなどで記録します。試験区内は大きく2分割されていて、半分は

自然の状態のエリア。もう半分はイネ科植物を除去してきたエリアです。私はその現状を見た瞬間、除去したエリアに、ライチョウが好むコケモモやガンコウランなどの高山植物を確認し、感激しました。

一方、人の手が入っていないエリアはイネ科植物が繁茂し、高山植物はほとんど見られませんでした。その後、私たちは除去してきたエリアを良く見て、残っているイネ科植物を除去する作業を続けました。この除去するエリアも2つに分割されています。上部は、かつての除去作業で根から除去した際に、周囲の高山植物の根も掘り起こしてしまい、土壌などにダメージを与えてしまったことから、今は根の上をちぎり取っています。下部は、エリア内の高山植物の背丈より上に伸びるイネ科植物を伐り取る作業をするのです。

このようにして、上部・下部の除去方法の比較が今後分析され、これからの除去活動に活かすのです。除去した葉などはエリアごとに集め、事後に乾燥させて量を図り、試験結果の分析資料とします。

保全活動の成果

私たちは、2日間で10ヶ所の調

査試験区を回って調査・作業し、今までの除去作業の成果が徐々に始めていることを実感することができました。現在は、イネ科植物などの除去試験の段階ですが、人の手を加えることで、高山帯の植生の回復を図っていくことが強く求められていると思いました。私は、行政と市民ボランティアが参画して取り組み、今回ような協働型環境保全活動に賛同し、これからも高山の環境保全(ライチョウ保護を含む)を目指して、積極的に参加していきたいと思いました。

(越後支部・自然保護委員長)



調査試験区内のイネ科植物の除去作業

PUBLIC INTEREST ACTIVITIES

八幡高原・霧ヶ谷湿原で環境保全活動

広島支部長 斎陽

霧ヶ谷湿原は、広島県と島根県の県境に近い八幡高原（西中国山地国定公園圏内）にある湿地の一つです。標高約800mで、太田川水系の最上流部にある幅約200m、長さ約700mの湿地です。この地は、かつて高地特有の貴重な湿地性動植物の生息地でした。

戦後は畜産振興策として牧場化のため草地開発が行なわれましたが、冬季の積雪と深い泥炭地層のため草地化は成功せず、その後は広島県の自然公園となりました。



繁茂する樹木の除去作業は人手が頼り

しかし、失われた湿原は元に戻らず、森林化が進行していました。

平成16年に「失われた湿原を再生しよう」と「八幡湿原自然再生協議会」が組織され、JAC広島支部もこの協議会の構成員となりました。こうしたなか、平成19年から広島県が環境省の補助を受け、自然再生推進法（過去に失われた生態系その他の自然環境を取り戻し、生物多様性の確保を通して自然と共生する社会の実現を図り、あわせて地球環境の保全に寄与することを目的とする）に基づき3年かけて湿原再生工事を行ない、平成21年に工事が完了しました。

再生工事了後は「その環境条件の整備を通し、自然の回復力で湿原再生を行なう」とし、管理は八幡湿原自然再生協議会に委ねられました。しかし、「自然の回復力で湿原再生を行なう」といっても、植物にとつて最も成長に適した環境にあり、徒長する樹木（特にハンノキ、カラコギカエデ、ノイバラ）などは常に人手による除去

作業が必要となります。そのため機動力のあるJAC広島支部が中心となり、平成23年から毎年4月と6月（ひろしま山の日）の年2回、地域や一般にも呼び掛けボランティア参加で整備・保全作業を実施しているところです。

こうした活動により徐々に湿地環境が蘇り、魚類ではスナヤツメ、ゴギ（岩魚）、両生類はカスミサンショウウオ、爬虫類はモリアオガエル、昆虫はヒロシマサナエ、ヒメシジミなど、また樹木はコブシ、カンボク、湿地性植物はマアザミ、ハンカイソウ、アケボノソウ、ノハナシロウブなど多種多様な動植物が見られるようになりました。

こうした環境は小中高生の環境学習（生物多様性）の場ともなっており、また、八幡高原を訪れる人々の自然観察スポットともなっています。

霧ヶ谷湿原は以前、土獄地区と呼ばれており古い時代からこの地域に暮らす人々の生活とともに保たれてきました。周囲は落葉広葉樹林やススキ原の広がる山裾に囲まれており、広葉樹（主にコナラ）は薪炭として山里に暮らす人々の生活を支える資源となり、落葉落



作業に参加したボランティアたちと記念写真に収まる

枝やクマザサは農地の肥料として利用され、ススキは茅葺き屋根の材料となりました。

ところが、今日では人々の生活は変化し、生活エネルギーは電気と化石燃料、肥料は化学肥料に変わり、エコ資源の利用はなくなりました。こうした人々の生活の変化は湿原に富栄養化をもたらし、樹木や草本類の成長を促しています。また、温暖化も一層拍車を掛けています。私たちの湿原保全活動には終わりはありません。多くの人にこの現状を理解してもらい、貴重な動植物の生息環境と湿原景観を維持するために、気長に取り組んでいかなければなりません。

東西南北

N

S

大下藤次郎と 「尾瀬の神苑」

小原茂延

画家、大下藤次郎は小島烏水の著書における挿画や、「六月の穂高岳」「西山峠」などの絵で知られるが、武田久吉の『尾瀬紀行』あるいは雑誌『太陽』の記事などから情報を得て、明治41年7月に絵の仲間弟子3人と語らって尾瀬を訪ねている。

「同好会」で尾瀬長蔵小屋の平野紀子さんに知遇を得たので、大下藤次郎のことをお尋ねすると、さつそく「大下藤次郎紀行文 尾瀬沼」という冊子を送っていただけだ。文末に大下藤次郎の略歴と、長蔵小屋2代目の平野長英さんが冊子の由来を書かれている。引用すると、「この小冊子は『大下藤次郎紀行文集』（昭和61年美術出版社

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

刊）『尾瀬沼』の節に、新しく大下藤次郎さんの思い出と、写真3点を加えて美術出版社の御好意により制作されたものです。ここに謝意を表します。（平野長英）とある。写真は、大下が訪ねた1908年に描いた尾瀬の風景画であり、それぞれ「尾瀬の神苑」「尾瀬ヶ原」「会津燧岳」と作品名がある。湖沼を愛する大下藤次郎にとって尾瀬はまさに「神苑」だったようで、「……ここに止まること五夜、その間出来るだけスケッチをした、あまりに材料の多いので、（中略）……私は出来ることなら、この地に完全な小屋を作って年々来て研究したい……」とまで心情を吐露している。紀行文に続いて、同行者である森島、赤城、八木氏を交えた『尾瀬日記』があり、当時の尾瀬に踏み入ることがいかに大変だったか、一方、それにも増して手付かずの尾瀬に歓喜した様子が読み取

れる。なんとか小屋に居を据えたが、蚊に悩まされ、雨漏りに毛布を濡らされ、寒さに震えての第一夜を過ごしている。檜枝岐の老漁師に5、6日逗留すると答えると、「1日で逃げ帰るべい」と言われたのも無理はない。

写生に向かう沼畔の路はズブズブと足心地が悪い。それでもアヤマやカンゾー（注…ニッコウキスゲのこと）が花盛り。燧ヶ岳を仰ぎ、左は洋々たる沼、右はシラカバなどの深林と、仙境たることに感動している。尾瀬ヶ原の池塘とお花畑の美しさに、一同は夜の苦しみも忘れて、「ああ、ここに一生涸れたい」とか「このまま死んでも惜しくはない」と繰り返したと大下は書き記している。まだ写真の普及に至っていない時代、大下が絵画や絵葉書、紀行文により尾瀬を紹介したこと、彼の真情などに平野長蔵翁は大いに感謝して長蔵、長英、長靖3代、そして紀子さんと続く親交が続いたという。長蔵小屋の沼側には大下藤次郎に感謝して、沼から上げた石に「大下藤次郎記念碑」と刻み建ち立てている。

大下藤次郎は東京の本郷真砂町生まれ。実家の敷地は約20000坪、旅人宿、馬宿、料理屋など手広く商売をしていたという。中丸精十郎、原田直次郎に師事。明治美術会（のち太平洋画会）、文展に出品。明治34年「水彩画の葉」を刊行、三宅克己や丸山晚霞らと水彩画の啓蒙に尽力したが、病に倒れ惜しくも41歳で早世した。

2005年に美術出版社から『水絵の福音使者 大下藤次郎』（評伝と画集）という立派な本が刊

「会員優待サービス」の追加

〈会員サービスWG〉

＊【東北北部】乳頭温泉郷・鶴の湯別館山の宿①／姉妹館駒ヶ岳温泉②／宿泊料金の5%引き／①1018714612
100／②2018714612
688／②①②とも前記に同じ

＊【東京都】シーアン市ヶ谷店／飲食代金の10%引き（消費税込み、ランチタイムを除く）①031527515220／JAC本部の近くにある中華料理店です。理事会をはじめ各委員会、同好会などが会議後、利用しています。

行された。この図書紹介は関塚貞亨氏の『山岳』第101年(2006年)に詳しい。なお、大下藤次郎

は森鷗外とも親交があり、「水彩画の葉」の序文を書いてもらっている。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

絆を育んだ信仰の山・白山

梅雨明け直前の7月20日(土)〜23日(火)、山行委員会企画の白山山行に東九州支部から準会員として初



御前峰山頂での記念撮影

参加。霊峰・白山に憧れ、会報の告知を見て申し込んだものの、経験・技術が乏しく、体力に自信のない私には、1日1400mの高低差、10kgを超えるザック重量など、様々な不安を抱きながらその日を迎えた。

【20日】JR小松駅(全員集合)〜白山荘(懇親会) 【21日】別当出合(甚之助避難小屋)〜黒ボコ岩〜白山室堂〜大汝峰〜御前峰〜白山室堂 【22日】白山室堂〜南竜山荘
*この日の別山往復は雨風が強くなり中止 【23日】南竜山荘〜甚之助避難小屋〜中飯場〜別当出合

古より「いのちを繋ぐ親神様」として全国から登拝者を集めた聖地といわれる白山は「水の宝庫」であった。雪溪、池、延命水、温泉、豊

かで清らかな水の恩恵により得られる高山植物やブナの原生林は我々を優しく包み、癒してくれた。特に見た目は可憐でありながら厳しい太陽の光や風雪に耐え、立派にたたずんでいる高山植物には、ともに自然の恵みによって生かされていることを気付かせてくれた。整備された石畳の道、山荘、ボランティアによる自然観察会など、白山に関わるすべてのものに、1300年前の開山以来、先人たちから守り受け継がれ、地域で育まれてきた白山流の温かいもてなしを感じ、感動の連続であった。

山行中はザックの重さが肩に食い込み、弱音を吐くことが多かった私であったが、リーダーの行程の組み方、ペース配分、休憩時の交流、柔軟で適切な判断と、自然との対話を楽しむつつ、互いに細部にわたり気遣うメンバー全員のお陰で完登することができた。全員が強い絆を感じる「理想のチーム」だと思った。

終日を山荘で過ごすことになった22日は、時間の経つのも忘れて親睦を深め、同時に様々な知識を先輩方から教えていただく座学の日となり、前後の実践経験とあい

令和元年度年次晩餐会のお知らせ

総務委員会

12月7日(土)、恒例の年次晩餐会を京王プラザホテルにて開催します。

案内状は、会報「山」(10月号)に同封して発送いたします。参加費の振込みをもって申込みとさせていただきます(同封の振込用紙を使用)。

令和初の展示や講演など、思い出に残る催し物を考えております。詳細は、同封の案内状をご覧ください。

開催日＝令和元年12月7日(土) 受付は12時30分から

会場＝京王プラザホテル(東京・新宿)

まっけてすべてが学びの機会であった。理想のチームの一員として一歩でも近付くことができるよう、知識や技術のみならず、心を磨き、努力を重ね、次回は正会員としてこの本部山行委員会企画で再会しようとした。

白山からもらったたくさんのエネルギー、会員の皆様との絆、すべてのものに感謝の気持ちが改めて湧き上がる。「白山」はまさに命を守り、命を繋いでいく宝の山であり、私にとってのパワースポットであった。

(東九州支部 河野達也)

Climbing&Medicine・84

山歩きをコツコツと続けよう！

村上和子

骨粗鬆という言葉聞いたことがあると思うが、どういうイメージをお持ちだろうか？

意外と身近に起こりつつある骨粗鬆症。これは生活習慣などによって骨の量が減ってしまい、骨の中の状態がスカスカになってしまうことだ。要するにカルシウムの量が減少し過ぎて、骨がもろくなってしまう状態を言う。ちょっと咳をしたら肋骨にヒビが入った、身長が2cm縮んだなど、骨粗鬆症の兆候を感じている方は多いかと思う。

では、骨を強くするにはどうしたら良いのだろうか？

カルシウム源になる食物を摂らなければならぬのは、言うまでもない。骨は常に骨を作る細胞と骨を壊す細胞とのバランスによって新しい骨を作っている。これを骨代謝というのだが、このバランスが崩れ、骨を壊す方が強くなってしまうと、骨はスカスカになってしまうのだ。これが骨粗鬆症だ。

骨代謝で骨を作ることとても大切なことなのだが、ただカルシウムを摂るだけでは、骨は強くはならない。せっかく体が吸収したカルシウムを確実に骨にするのは、まず運動と重力を掛けること。まさに山歩きはうってつけの運動だ。登山家である加藤文太郎氏のようにカルシウム源である煮干しを行動食とするのは、今更ながらすばら

しいと感じる。

それからもう一つ骨を作るのに重要なことがある。カルシウムは腸管から吸収されるが、その吸収にはビタミンDが必要だ。ビタミンDは食事から摂取できるが、人間は皮膚で合成させることができる。この合成に必要なのが、太陽の光なのだ。

これらのことを考えると、山歩きは骨を強くするのに適していることがお分かりいただけると思う。

骨代謝を高額の注射やお薬に頼ることなく、まず楽しみながら骨を元気にすることは一石二鳥なのだ。

ただ、何事にもほどほどの匙加減が必要だ。体を壊すような過度の運動、過度の日焼けには要注意だ。自分に合った山歩きをコツコツ、骨々と続ければ、楽しく健康の維持ができるだろう。



山歩きは骨を強くするのにとても適している

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

寄附金および助成金などの受入報告

(令和元年9月30日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
井藤 恵美子 会員	50	日本山岳会運営費用
小貫 伸一 会員	20	有志からのご寄附のお願いに対する永年会員からのご寄附
中山 茂樹 会員	100	青年部活動 (講習、海外登山等)
匿名希望	1,000	くじゅう山遭難碑の修復・保守に係る費用
匿名希望	10	日本山岳会運営費用

No	書名	著者	出版社	発行年、その他	価格
161	ブータンの花	中尾佐助、西岡京治	朝日新聞社	昭和59年第一刷	500
162	ミニヤコンカ奇跡の生還 独占手記	松田宏也	山と溪谷社	1983年第一刷	500
164	高原と高山の植物①～④	清水建美	保育社	昭和62年初版	1,000
174	石岡繁雄が語る 氷壁・ナイロンザイル事件の真実	石岡繁雄、和田武男著	あるむ	2007年第一刷 帯	1,000
175	新編 邂逅の山	手塚宗求	恒文社	1991年第一刷 函	600
176	ラインホルト・メスナー自伝 自由なる魂を求めて	ラインホルト・メスナー著、松浦雅之訳	T B S ブリタニカ	1994年初版第5刷	1,000
178	わが回想のアルプス	近藤 等	東京新聞出版局	2010年初版 署名有	1,000
184	剣岳をどう登るか	佐伯邦夫	北国出版社	昭和51年	500
186	サバイバル登山家	服部文祥	みすず書房	2006年第4版 帯	800
188	山毛櫨林 創立四〇周年記念誌	広島山の会	記念誌編集委員会	1990年 函	800
190	シャー・イ・アンジュマン登頂	大垣ヒマラヤ委員会	大垣市役所保健体育課	昭和44年 函	1,000
192	無償の征服者	リオネル・トレイ著、横川文雄・大森久雄訳	二見書房	昭和41年初版 函	800
193	シルクロードの旅	深田久弥	朝日新聞社	昭和46年第2版 函	800
194	シルクロード 過去と現在	深田久弥・長沢和俊著	白水社	1969年第3版 函	700
195	白きたおやかな峰	北 杜夫	新潮社	昭和52年30刷 函	800
196	マナスル西壁 鉄の時代のヒマラヤ	高橋 照	文藝春秋	昭和47年初版 函	600
197	ヒマラヤの東 山岳地図帳 日本山岳会創立110周年記念出版	中村 保	ナカニシヤ出版	2016年初版1刷	1,000
198	登山の運動生理学百科	山本正嘉	東京新聞出版	2007年12刷 帯	800
199	新日本山岳史	日本山岳会編	ナカニシヤ出版	2005年第一版1刷 函 帯	1,500
200	ケルン1～10 および 改題 復刻版	ケルン編輯室	アテネ書房	1978年 函	1,500
211	日本三百名山 上・中・下	日本山岳会編	山と溪谷社	2014年初版第一刷	600
216	ぎふ百山 復刻版	岐阜新聞社	岐阜新聞社	平成9年復刻第2刷	500
223	雪と山	ガストン・レビュファ著、近藤等訳	新潮社	昭和36年	500
224	天と地の間に	ガストン・レビュファ著、近藤等訳	新潮社	昭和38年	500
225	美しきマッターホルン	ガストン・レビュファ著、近藤等訳	新潮社	昭和42年	500
226	美しきモン・ブラン山群	ガストン・レビュファ著、近藤等訳	新潮社	昭和44年	500
245	車窓の山旅 中央線から見える山	山村正光	実業之日本社	1985年第三刷	600
250	折々の山	望月達夫	茗溪堂	1980年 ケース入 署名有	600
260	車窓の山旅 中央線から見える山	山村正光	実業之日本社	1985年第五刷 帯	600
267	チベット滞在記 新装版	多田等観	白水社	1999年 帯	800
270	第二回チベット旅行記	河口慧海	河口慧海の会	昭和41年 ケース入	800
271	秘境西域八年の潜行(上巻) 七度ヒマラヤをこえた日本人ラマ僧の手記	西川一三	芙蓉書房	昭和42年初版	1,000
272	秘境西域八年の潜行(下巻) わが青春を捧げた神秘のチベット	西川一三	芙蓉書房	昭和43年 帯	
273	西藏 —西蔵遊記— —西蔵文化の新研究—	青木文政	芙蓉書房	昭和44年第一刷	500
282	遊歩大全(上)(下)	コリン・フレッチャー著、芦沢一洋訳	森林書房	1981年、1982年 四刷 帯	800
283	北アルプス博物誌 Ⅲ 動物・自然保護	大町山岳博物館編	信濃路	昭和54年四刷	600
284	佐伯邦夫の山とスキー大全	佐伯邦夫	シー・エー・ビー	1995年第一刷 署名有	800
308	覆刻 山と溪谷 創刊号・2号・3号	山と溪谷社編	山と溪谷社	昭和55年 ペーパーナイフ付	800
Y2	AMERICANS ON EVEREST	JAMES RAMSEY ULIMAN	J.B.Lippincott Co.	1964年	500
Y4	KANGCHENJUNGA THE UNTRODDEN PEAK	Charles Evans	HODDER&STOUGHTON	1956年	500
Y5	AT GRIPS WITH JAJJU	JEAN FRANCO&LIONEL TERRAY	VICTOR GOLLANCZ LIMITED	1967年	1,000
Y6	MOUNTAIN CRAFT	GEOFFREY WINTHROP YOUNG	METHUEN & CO. LTD.	1954年	500
Y7	THE UNIQUE MOUNTAINS	NASEER ULLAH AWAN	Alpine Club of Pakistan	1990年	500
Y9	QUEST FOR ADVENTURE	CHRIS BONINGRON	HODDER AND STOUGHTON	1981年	500
Y22	FOUR AGAINST EVEREST	Woodrow Wilson Sayre	ARTHUR BARKER LIMITED	1964年	500
Y23	TO THE THIRD POLE	G. O. DYHRENFURTH	WERNER LAURIE	1955年	1,000
Y24	THE MOUNTAIN WORLD 1960/61	MALCOLM BARNES	GEORGE ALLEN&UNWIN LTD	1961年	500
Y25	THE MOUNTAIN WORLD 1964/65	MALCOLM BARNES	GEORGE ALLEN&UNWIN LTD	1966年	500
Y26	ENTRE TERRE ET CIENTRE TERRE ET CIDLL	Gaston Rebuffat, Pierre Tairraz	ARTHAUD	1962年	500
Y27	JAPANESE EXPEDIRION EXPERIENCES IN THE NEPAL HIMALAYA	RAM KUMAR PANDAY	Nepal-Nippon Reserch Center	2003年	500
Y28	The Hill Magars and their Neighbours	Kawakita Jiro	TOKAI UNIVERSITY PRESS	1974年	500

入札本

No	書名	著者	出版社	発行年、その他	最低入札価格
★1	モン・ブラン山群 特選100コース	ガストン・レビュファ著 近藤 等訳	山と溪谷社	1974年 初版	4000～
★2	ヒマラヤ名峰事典	薬師義美・雁部貞夫	平凡社	1996年 初版	5000～
★3	ヒマラヤ 白川義員作品集	白川義員	小学館	昭和46年初版 函 付録付き	2000～
★4	日本アルプス	田淵行男	国際情報社	1978年第3版 函・函 付録付き	5000～
★5	鹿島槍研究	吉田二郎	朋文堂	昭和32年	2000～
★6	アルプスの蒼い空に 上・下	近藤 等	茗溪堂	2001年 上下 函 署名有	5000～
★7	西穂高岳雷遭難事故調査報告書 松本深志高等学校 1969	長野県松本深志高等学校	長野県松本深志高等学校	昭和44年 再版	3000～

●頒布価格が400円以下の本は省略しています。全目録はホームページ(図書委員会)から検索できます。また、必要な方にはお送りしますので、お申し出ください。

●目録の申込み、問合せは日本山岳会事務局(図書委員会)まで ☎03-3261-4433 ✉tosho@jac.or.jp

図書交換会出品目録および購入申込みの案内

今年も年次晩餐会で「図書交換会」を開催します。出品本は約400冊です。交換会当日の詳細は19ページの「インフォメーション」欄に掲載していますが、会場に来場できない方は、下記の要領で購入の申込みを行なってください。

- 郵便(日本山岳会 図書委員会宛)またはメール(図書委員会 tosho@jac.or.jp)で11月15日までにお申込みください。
- 購入希望図書の番号、書名、購入希望者の名前と会員番号を必ずご記入ください。入札本については入札価格も記入願います。
- 複数の申込みがあった場合は、当日、会場で抽選を行ないます。来場できない方の抽選は図書委員が代行し、本は交換会終了後にお送りします
- 購入図書の送料は購入者負担とし、代金と一緒に請求させていただきます。

No	書名	著者	出版社	発行年、その他	価格
11	遙かなるヒマラヤ わがネパール踏査行	薬師義美	あかね書房	1969年 第一刷 函 帯	800
12	モン・ブランからヒマラヤへ	レビュファ 近藤等訳	白水社	1956年 函	1000
13	マナスル西壁 鉄の時代のヒマラヤ	高橋 照	文藝春秋	昭和47年 初版 函	800
15	世界山岳名著全集7 K2登頂 山、わが生命	A・デジオ 他	あかね書房	1966年 第一刷 函	500
16	ヒマラヤ名著全集8 ナンガ・パルバット登攀史	パウアー 横川文雄訳	あかね書房	1969年 第一刷 函	500
17	世界山岳名著全集6 アイガー北壁に挑む 他	F・カスバレク 他	あかね書房	1966年 第一刷 函	500
18	世界山岳名著全集8 マッターホルンの暗い壁 他	T・ヒーベラー 他	あかね書房	1966年 第二刷 函	500
19	現代登山全集9 山の危険 山の遭難	諏訪多栄蔵 他編	創元新社	昭和39年 三版 函	500
20	現代登山全集9 山の危険 山の遭難	諏訪多栄蔵 他編	創元新社	昭和42年 四版 改訂 函	500
21	ヒマラヤに挑戦して	パウアー 伊藤愿 訳	黒百合社	昭和6年 函	1,000
22	山 II	串田孫一 編	筑摩書房	昭和35年 函	600
23	山の絵日記	串田孫一	ダヴィッド社	昭和32年再版 函	600
24	山と漂白	谷川徹三	朋文堂	昭和33年 函	600
27	星と嵐	レビュファ 近藤等訳	白水社	1963年 6版 函	600
29	八千米の上と下	H・ブル 横川文雄訳	朋文堂	昭和30年	500
31	わが山の生涯	ロングスタッフ 望月達夫訳	白水社	1957年 函	500
35	ヒマラヤの高峰 第一巻～第五巻	深田久弥	雪華社	1964年初版 函	1,500
40	高所登山研究	日本山岳会編	山と溪谷社	昭和50年初版 函	500
42	写真集 ヒマラヤの高峰 深田久弥・山の文学全集別巻	朝日新聞社	朝日新聞社	昭和53年	500
44	山岳講座1～6	川崎隆章 近藤等編	白水社	1954年 三版 函	500
51	怪峰ジャヌーからの報告 1976	小川信之編	山学同志会・ジャヌー登山隊	昭和51年	500
55	雪と岩	ガスン・レビュファ著 近藤等訳	新潮社	昭和36年	500
56	天と地の間に	ガスン・レビュファ著 近藤等訳	新潮社	昭和38年	500
63	ヒマラヤ名著全集3 エヴェレストへの闘い	ノートン著 山崎安治訳	あかね書房	1968年	500
64	エベレスト南西壁 英国隊初登頂の記録	クリス・ボニントン 大浦暁生・平林克敏訳	集英社	昭和52年	600
65	世界の山々Ⅱ	近藤 等編	白水社	1964年 函	1,000
67	遙かなる本路の尾根 MAKALU1970 日本山岳会東海支部	原 真・浅見正夫編	茗溪堂	昭和47年 函	500
68	青と白の巖し DHUALAGIRI-IV. 1972 群馬県ヒマヤ登山実行委員会	川辺柳一他編	群馬県山岳連盟	1974年 函	500
69	ダウラギリ V 1975	岡山大学ネパール・ヒマラヤ登山隊	岡山大学山岳会	1976年	500
72	写真集 ヒマラヤを飛ぶ	山田圭一	中日新聞東京本社	昭和50年 初版2000部 函	500
74	アルプス三つの壁	A・ヘックマイヤー著 安川茂雄訳	二見書房	昭和41年 初版	500
76	わが山々へ	ウルテル・ボナッチ著 近藤等訳	白水社	1966年	500
78	シャモニの休日	近藤 等	白水社	1963年 再版 函	500
79	天国と地獄のあいだ	トニー・ヒーベラー著 川村光郎訳	二見書房	昭和42年 初版 函	500
82	アンナプルナ南壁	クリス・ボニントン 山崎安治訳	白水社	1972年 函	500
84	ジャヌー北壁	小西政継	白水社	1976年 函	500
87	ヒマラヤの高峰1～3	深田久弥著 望月達夫他編	白水社	1973年 函	2,000
92	セントエライアンスとマッキンレー	関西登高会アラスカ登山報告書	関西登高会	昭和42年 函	500
93	ヤルン・カン	京都大学学士山岳会	朝日新聞社	1975年	600
94	ヤルン・カン	京都大学学士山岳会	朝日新聞社	1975年	600
97	七つの最高峰	ディック・バス&フランク・ウェルズリック・リッジウェイ 三浦恵美里訳	文芸春秋	1995年 第二刷 帯	500
100	チャムラン ヒマラヤの詩と真実	岡本丈夫 他	ベースボールマガジン社	昭和40年 函	500
126	ヒマラヤ その探検と登山の歴史	ケニス・メイスン著 田辺主計・望月達夫訳	白水社	1957年 函	500
129	横 有恒全集Ⅰ憧憬・Ⅱ情熱・Ⅲ静寂	横 有恒	五月書房	1991年 函	1,000
134	白い王国 安久一成ヒマラヤ写真集	安久一成	東京新聞出版局	昭和48年第2刷 函	500
135	北アルプス	日本山岳写真集団	実業之日本社	昭和54年初版 函	500
136	大石一馬遺作写真集 ヒマラヤ	大石一馬	山と溪谷社	1995年 帯	500
137	植村直己記念館	文藝春秋編	文藝春秋	1991年第一刷 函	800
138	Himalaya	近藤 等	朋文堂	昭和34年	500
139	エヴェレスト その人間的記録	ウルフリッド・ノス著、浦松佐太郎訳	文藝春秋社	昭和31年七版	200
142	氷河の旅	田中 薫	朋文堂	昭和18年	500
144	コンサイス外国山名辞典	吉沢一郎監修	三省堂	昭和59年第一刷 函	500
147	最後の青い山	ラルフ・パーカー著、安東小千世訳	二玄社	1961年	500
158	わが山の生涯	ロングスタッフ著、望月達夫訳	白水社	1957年再版 函	500

 図書受入報告(2019年9月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
M.アダムス・森夏樹(訳)	アラスカ探検記：最後のフロンティアを歩く	434p/19cm	青土社	2019	出版社寄贈
中村晃忠	山は心の支えだった	134p/19cm	サイエンティスト社	2019	杉本賢治氏寄贈
坂本大三郎	山の神々：伝承と神話の道をたどる	255p/19cm	A & F	2019	出版社寄贈
服部小雪	はっとりさんちの狩猟な毎日	159p/19cm	河出書房新社	2019	江本嘉信氏寄贈
T.コールドウェル・堀内瑛司(訳)	ザ・プッシュ：ヨセミテ エル・キャピタンに懸けたクライマーの軌跡	450p/19cm	白水社	2019	出版社寄贈
長岩嘉悦	山と友(共)に歩んで70年	142p/26cm	雄物川印刷	2019	著者寄贈
早稲田大学岳友会(編)	ALPINE FORUM (VII)：林会長追悼・創設60年特集	292p/26cm	早稲田大学岳友会	2019	発行者寄贈
北杜夫	どくとるマンボウ 青春の山(ヤマケイ文庫)	279p/15cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
石丸哲也	東京発 半日ゆるゆる登山(ヤマケイ新書)	320p/18cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
日本山岳文化学会(編)	社会人山岳会会報：ケルンと岳人たち	146p/21cm	日本山岳文化学会	2007	発行者寄贈
鈴木信太郎、中平解	新スタンダード仏和辞典	1980p/19cm	大修館書店	1988	大森久雄氏寄贈
T.Fay & W.Lang	The Japan Alps and Mount Fuji	391p/17cm	Cicerone	2019	購入
Kat Davis	Japan's Kumano Kodo Pilgrimage	233p/17cm	Cicerone	2019	購入

会務報告

令和元年度第5回(9月度)理事会 議事録

日時 令和元年9月11日(水) 19時

00分～21時20分

場所 集会室

【出席者】古野会長、野澤・山本・

坂井各副会長、永田・萩原・

古川各常務理事、安井・清

水・飯田・近藤・波多野各

理事、石川監事

【欠席者】清登・神尾・柏各理事、

黒川監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・平成30年度の財産目録の修正
および内閣府への資料提出承認の
件

平成30年度の決算報告について
内閣府より財産目録の修正指示お
よび追加資料提出の要請があり、
内閣府に提出する修正の確認およ
び追加書類の内容について審議し

た。なお、決算報告は総会の承認
事項であるが、財産目録の軽微な
字句の追加削除であるため、令和
2年度の総会で報告することとし
た。(賛成12名、反対なしで承認)

2・監査法人との財務に関するの
指導・助言業務契約の継続につい
て

当年度の太陽有限責任監査法人
との財務に関するの指導・助言業
務契約の継続について審議した。

(賛成12名、反対なしで承認)

3・100万円以上の寄附1件が

あったため、受入について審議し
た。(賛成12名、反対なしで承認)

4・評議員の選任について

新たな評議員15名について審議
をした。山本良三、成川隆顕、神
崎忠男、橋本清、今村千秋、吉永
英明、吉川正幸、伊丹紹泰、小林
政志、重廣恒夫、絹川祥夫、大谷
亮、森武昭、中山茂樹、野口いつ
み。(賛成12名、反対なしで承認)

5・秩父宮記念山岳賞審査委員の
選任について

秩父宮記念山岳賞審査委員の選
任について審議をした。(賛成12
名、反対なしで承認)

6・海外登山助成金審査委員の選
任について

海外登山助成金審査委員の選任
について審議をした。(賛成12名、
反対なしで承認)

7・令和元年前期・海外登山助成
金審査結果について

海外登山助成金審査会の審査報
告を受けて審議し、令和元年前期・
海外登山助成金を以下の登山隊1
隊に対し助成することとした。

(賛成12名、反対なしで承認)

静岡大学山岳部「キルギスタン

未踏峰2019遠征隊」(9月17

日～10月17日、学生5名)

8・3年を経過した準会員の、正

会員への移行の簡素化

準会員制度検証ワーキンググル
ープから、準会員から正会員への
移行手続きを簡素化する提案があ
り、審議した。準会員は3年で退
会となり、改めて正会員になる手
続きをする必要があるが、移行手
続きに手数が掛かることが推察さ
れるため。(賛成12名、反対なしで

承認)

9・会員の紺綬褒章を申請する件

500万円の寄附があった梶正
彦会員について、紺綬褒章授与を
国に推薦することについて審議し
た。(賛成12名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・支部合同会議の議題について
協議した。(永田)

【報告事項】

1・入会希望者10名、準会員入会
希望者16名について入会承認を行
なったとの報告があった。(古野)

2・寄付金14件の受領について報
告があった。(古川)

3・登山計画書の提出状況につい
て報告があった。(山本)

4・今期の委員長決定について報
告があった。(永田)

5・入会申込書の修正について報
告があった。(永田)

6・準会員制度検証ワーキンググ
ループで行なった、準会員のアン
ケート結果について報告があった。

(永田)

7・上高地山岳研究所の「ミニ水
力発電」の継続実施について報告
があった。(安井)

8・9月7日に行なわれた新入会
員オリエンテーションについて報
告があった。新入会員出席者24名
(永田)

9・家族登山普及委員会の親子登
山実施(6月と8月)について報告
があった。(波多野)

10・「第10回日本山岳会全国森づ
くり連絡協議会」の開催について
報告があった。(飯田)

11・植村直己冒険館「2019日
本冒険フォーラム」の後援依頼の
承諾について報告があった。(永
田)

12・雪崩事故防止研究会が行なう
講演会の後援依頼の承諾について
報告があった。(萩原)

13・今年度の年次晩餐会について
報告があった。(永田)

14・会報「山」9月号の発行につい
て報告があった。(節田)

【連絡事項】

1・次回全国支部懇談会は、令和
2年5月16日(17日、宮崎支部で
行なわれる。(坂井)

ルーム目誌 9月

2日 総務委員会 スキークラブ

緑爽会

3日 常務理事会 スケッチクラ
ブ

4日 山行委員会 図書委員会

5日 YOUTH CLUB

6日 YOUTH CLUB 山岳

7日 地理クラブ

8日 総務委員会 YOUTH
CLUB

9日 総務委員会(新入会員オリ
エンテーション)

10日 公益法人運営委員会 資料

11日 映像委員会 学生部 スキ
ークラブ スケッチクラブ

12日 山岳研究所運営委員会 財

13日 務委員会 フォトクラブ

14日 理事会 休山会 山想倶楽
部

15日 九五会

16日 図書委員会

17日 「山の日」事業委員会 支部

18日 事業委員会 沢登り同好
会Ⅱ

19日 総務委員会 図書委員会

20日 三水会 スキークラブ つ
くも会

21日 科学委員会 国際委員会

22日 みちのり山の会

23日 会報編集委員会 自然保護
委員会 フォトクラブ

21日 山の自然学研究会

24日 デジタルメディア委員会

25日 遭難対策委員会 平日クラ
ブ

26日 家族登山普及委員会 00会

27日 麗山会

28日 学生部 山遊会

29日 総務委員会 公益法人運営
委員会

30日 青年部 マウンテンカルチ
ャークラブ

I N F O R M

インフォメーション

A T N

◆晩餐会記念懇親山行のご案内

山行委員会

御坂山塊の「三ツ峠」へのハイキ
ングを行ないます。三ツ峠は標高
1785m(開運山)で、富士山を
直近で見渡せる展望の良い山です。

日本二百名山に選定されています。
三ツ峠登山口から往復します。往
復ともチャーターバスを利用する
予定です。

日時 令和元年12月8日(日曜日)

9月来室者 499名

会員異動

物故

稲垣純男(4778) 19・9・16

宮森常雄(5723) 19・8・14

宮前庄三(12487) 19・9・19

退会

渡辺欣次(2808) 越後

村井龍一(5091)

繁田義康(15936) 関西

定員 100人(定員になり次第、
締切りとします。)

参加費 5000円(バス代、記念
品、記念写真代等含む)

集合 JR新宿駅西口 工学院大
学ビル前 午前8時(時間厳
守、遅延の場合は要連絡)

解散 JR新宿駅西口 午後5時
(予定)

歩程 昼食休憩を含めて4時間
(コースタイム3時間)。標高

499名

差550m。雨天決行。

参加希望の方は、11月15日(金)までに、必ず参加者の個人名(会員番号も明記の上)で記念懇親山行専用払込用紙(晩餐会のご案内に同封、青い用紙です)にてお振込みください。〈振込先〓ゆうちょ銀行、口座番号0019007767267、名義:シヤ)ニホンサンガクカイサンコウインカイ〉振込まれた方には後日、詳細案内をお送りします。参加は、事前振込みが条件です。また、貸切バス予約のために振込み後の返金はいたしかねます。

問合せ 征矢三樹
TEL 080-3558-3250、
✉ sanko@jac.or.jp

◆第37回図書交換会

図書委員会

恒例となっている図書交換会を年次晩餐会で開催します、日時〓令和元年12月7日(土) 13時開場、14時から抽選を開始します。陳列されている本をご覧の上、抽選開始時間までに購入申込みをお願いします。

年次晩餐会に出席されない会員も参加できます。また、例年どおり

事前申込みも受付けます(事前申し込みについては15ページに記載)。
会場 京王プラザホテル 年次晩餐会会場

問合せ 近藤雅幸

TEL 080-6629-4630

✉ yabyama_hg1486.99@com.
home.ne.jp

◆「山のマナーノート」英語版刊行のお知らせ

昨年、科学委員会と自然保護委員会が共同で「山のマナーノート」日本語版を出版しました。大変好評で、多くの方から外国人登山者向けの英語版の要望がありました。この度、英語版「Mountain Hiking Etiquette」を刊行しました。各支部、山岳観光地、登山者などに配布中です。ご希望の方は左記にご連絡ください。

✉ jac-takaku@emc.jp

科学委員会委員長・平野裕也

◆蔵王スキー懇親会のお知らせ

山行委員会

令和2年1月のスキー懇親会は蔵王スキー場で開催いたします。

日程 令和2年1月20日(月)〜23日(木)

費用 3万7000円 通信費、

保険料、懇親会費用など含む

宿泊 蔵王温泉・五感の湯 つる

やホテル

定員 20名 現地集合・現地解散

申込み 12月20日までに、会員番

号、住所、氏名、電話などを

明記し、郵送、FAX、✉で

高橋聡まで。〒102-000

72 東京都千代田区飯田橋

2-12-10 FAX 03-3222-0

908・✉ sanko@jac.or.jp

*参加申込み者に詳細案内送付。

『山岳』2019年の訂正

先ごろ刊行された『山岳』2019年版(第114号)「私が敬愛した会員たち」の記事中、以下の誤りがありましたので、訂正させていただきますとともに、深くお詫び申し上げます。

*106頁上段、右から10行目、

「今西(壽雄)さん」とあるのは、「吉

田(宏)さん」の誤りです。

*118頁上段、1〜2行目、

「滝谷第一尾根を出牛陽太郎さん

と一緒に初登攀した」とあるのは、

「出牛陽太郎さんと滝谷A沢を詰

めた」の誤りでした。

『山岳』編集委員会

◆編集後記◆

●この夏、ドイツ文学者でエッセイストの池内紀(きよ)さんが亡くなられました。先生は大の旅好き、山好きで、松のマイ風呂桶をザックに忍ばせて旅するほどの温泉好きでした。私も霧積温泉―鼻曲山―小瀬温泉や、高天原温泉―雲ノ平―蒲田温泉などの山旅に一緒にさせていただいたことがあります。

●『カフカ小説全集』やゲーテ『ファウスト』の翻訳など膨大な数の著作を持ち、元東大教授という偉い先生でしたが、驕らず飾らず、山を歩く姿は実に飄々としており、なんでも食べ、お酒もよく飲まれました。いわば「人生の達人」のような方でしたから、近刊の『すごいトシヨリBOOK』でも読んで、その生き方を学ばせていただくように思っています。

(節田重節)

日本山岳会会報 山 893号

2019年(令和元年)10月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社